

## アルベール・カミュの思想と自然

栗 国 孝

### 1. カミュに於ける神的存在としての自然

アルベール・カミュの思想と文学宇宙の根底に、「神」などの宗教的観念と無縁の、人間や世界の自然に従って生きる「自然主義」があることは、明白であるように思われる。カミュは、その卓越した感性によって自然の美に感応しつつ、理性と判断力をもって人間の自然に従って生きた〈自然児〉とも言え、何らの宗教的観念や既成の概念もなく、無垢の思想をもって生き、小説文学世界にそのような人物たちを登場させ、描いている。私見によれば、その自然主義は、『異邦人 *L'Etranger*』のムルソーから『転落 *La Chute*』のクラマンズにまで至っていると思われる。その「自然」とは、カミュに於いては、「神」に対置する概念としてあり、生命現象を営む存在としての人間に普遍的にある自然であり、また人間存在が自然の一構成要素としてあるという認識をもちつつ、自然に感応し統合化していく中から人間の至福を感受していく自然主義である<sup>1</sup>。『結婚 *Noces*』というエッセーの冒頭 *Noces à Tipasa*<sup>2</sup>で、カミュは、「春になると、ティパザは神々によって住まわれる。そして神々は、太陽やアプサントの香り、銀の鎧を着た海、真っ青な空、花で覆われた遺跡、石の堆積の中で沸き立つ光の中で語っている。」と自然讃歌を美しく謳いあげているが、

Au printemps, Tipasa est habitée par les dieux et les dieux parlent dans le soleil et l'odeur des absinthes, la mer cuirassée d'argent, le ciel bleu écru, les ruines couvertes de fleurs et la lumière à gros bouillons dans les amas de pierres. (PL II. 55)

神々とは、カミュにとって自然のことなのであり、『裏と表 *L'Envers et l'endroit*』の序文の中で、「私が、神としていた世界」と明言しているように、

Changer la vie, oui, mais non le monde dont je faisais ma divinité. (PL II, 6)

また、キリスト教の聖サルサ教会堂が、松や糸杉などのある丘の美しい自然の眺望や波の打ち寄せる海などの「世界」のメロディーそのものである「自然」の流入によって満たされ自然によって宗教世界たる教会が支配されている、と語っていることから分かるように、

La basilique Sainte-Salsa est chrétienne, mais chaque fois qu'on regarde par une ouverture, c'est la mélodie du monde qui parvient jusqu'à nous : coteaux plantés de pins et de cyprès, ou bien la mer qui roule ses chiens blancs à une vingtaine de mètres. (PL II, 57)

「世界」というものが、カミュに於いては、「自然」と同意義語<sup>3</sup>であることを考えると、カミュにとって、「自然」が神のような存在であり、所謂、宗教的な「神」の対置概念として「自然」を置くことがカミュに於いては可能となる。また、一般的な人々にとって、「神」とともにあることが至福につながるように、カミュにとって、一般の人々の神のような存在たる「自然」とともにあることが至福につながり、その自然・大地との愛ある和合・協調・理解がカミュの「宗教」となっていく。

cet accord de la main et des fleurs—cette entente amoureuse de la terre et de l'homme délivré de l'humain—ah! je m'y convertirais bien si elle n'était déjà ma religion. (PL II, 84)

無神論者のカミュにとって、一般の人々の「神」に相応する存在が「自然」であり、また、「神」という存在が畏れ多い存在であるのと同様、「自然」の存在もカミュにとって、二重の存在、アンビヴァレントな存在であることも事実である。「世界は美しい、それなしには救いはない。」と *Noces* のなかで言及し、

Le monde est beau, et hors de lui, point de salut. (PL II, 87)

或いはまた、自然との愛ある和合について語っているように、

Non, ce n'était pas moi qui comptais, ni le monde, mais seulement l'accord et le silence qui de lui à moi faisait naître l'amour. (PL II, 60)

「自然」に対する愛や安らぎ、救いといったものがあると同時に、『シーシュポスの神話 *Le Mythe de sisyphé*』に於いて、不条理の発生起因として、自然のもつ原初の敵意についても触れ、

L'hostilité primitive du monde, à travers les millénaires, remonte vers nous. Pour une seconde, nous ne le comprenons plus puisque pendant des siècles nous n'avons compris en lui que les figures et les dessins que préalablement nous y mettions, puisque désormais les forces nous manquent pour user de cet artifice. Le monde nous échappe puisqu'il redevient lui-même. Ces décors masqués par l'habitude redeviennent ce qu'ils sont. Ils s'éloignent de nous. De même qu'il est des jours où, sous le visage familier d'une femme, on retrouve comme une étrangère celle qu'on avait aimée il y a des mois ou des années, peut-être allons-nous désirer même ce qui nous rend soudain si seuls. Mais le temps n'est pas encore venu. Une seule chose : cette épaisseur et cette étrangeté du monde, c'est l'absurde. (PL II, 108)

自然の美によって心救われると同時に、自然が本来持っている、人間の感情や情動、理性・理解力など、人間的なものを否認する対置存在としての、非人間的な「物」としての自然の存在も自覚している、ということも指摘せざる得ない。

いずれにしても、事実に基づいて生きる「現実主義者」カミュとしては、その存在を実感し確認することの出来ない抽象的・形而上学的な「神」に拠るのではなく、その美が人間を救うこともある、そして人間存在がその一構成要素である具体的・現実的な存在たる「自然」に従って生きる、無神論的「自然主義」の道を辿っていくのは、極自然な当然な理である。

## 2. 不条理の思想

ところで、カミュの初期思想「不条理の思想」が、無神論をその根底にしていることは言うまでもないが、ただそれは、理論武装した「無神論」ではない。あくまで無理をしない「自然主義」といったものが、その根底にある。そうしたカミュの「自然主義」・ナチュリズムといったものはどこからやってくるのか、と考察すると、それは当然のことながら、カミュが生まれ育った太陽や自然の美と豊穡<sup>4</sup>に満ちた「地中海的風土」に由来する、ということが言える。そうした自然の美と豊穡に満ちた「地中海

的風土」の中で、自然児・カミュは育ち、無垢の思想、ナチュリスト的思想たる「不条理の思想」が生まれてくる。そして、そのような自然児・カミュ、ナチュリストを生み育む風土として地中海的風土、及びその自然について言及するのが初期作品の『裏と表』や『結婚』であり、こうした作品群の中でカミュが把握する人間と自然との関係について考察することができる。

先ず、カミュの根幹の思想である「不条理の思想」がどういったものであったか再考してみたい。不条理とは、総てを理解し、解明し、割り切りたいと欲する限界性のある「人間理性」と、人間理性では説明のつかないものに満ちた「世界」との相対峙状況であった。カミュは、「不条理という言葉の当てはまるのは、この世界が理性では割り切れず、しかも人間の奥底には明晰を求める死物狂いの願望が激しく鳴り響いていて、この両者がともに相対峙したままである状態についてなのだ。」と述べている。

Mais ce qui est absurde, c'est la confrontation de cet irrationnel et de ce désir éperdu de clarté dont l'appel résonne au plus profond de l'homme (PL II, 113)

人間が世界の事象を理解したい、人間理性で割り切りたいと欲するのは、人間が理解し説明することのできる事象があり、人間理性の有効な領域があるからである。然し、この世界は、人間理性で説明のつかない事象、分野の方が多く、そこに不条理が生まれ発生し、キルケゴールやフッサールなどの思想家達を始めとして、「神」の概念でもって、こうしたわからない事象、人間理性で割り切れない説明のつかない事象を説明し、論理的「整合性」を得ようとする。「神」の概念を持ち出せば、総てがうまく説明がつき、何の論理的問題性や矛盾も出てこず、不条理の相対峙状況が解消される。然し、カミュは、そうした思考方法、対処の仕方は、誠実ではないと考え、限界性はあるが、有効性を持つ人間理性でもって、物事や事象を明晰に見ることを要求し、そうしたなかで確定される事実、現実に沿って着実、誠実に生き、行動することを求めていく。カミュは「私の知っていること、確かなこと、否定できないこと、拒むことのできないこと、そうしたことが問題であり、重要である」と述べ、

Ce que je sais, ce qui est sûr, ce que je ne peux nier, ce que je ne peux rejeter, voilà ce qui compte. (PL II, 136)

更に、「不条理の人間が自らに求めるものは、自ら知っていることのみによって生きていき、あるところのものでやりくりし、確かでないものは何も導入しないことである」

と言っているが、

Ainsi ce qu'il exige de lui-même, c'est de vivre *seulement* avec ce qu'il sait, de s'arranger de ce qui est et ne rien faire intervenir qui ne soit certain. (PL II, 137)

従って、カミュ的立場からすると、「神」という存在が実感されれば、その「神」の概念で総てを説明し論理的整合性を得ていいが、然し、現実には、事実認定として神の存在を確認、感知できない以上、分かるものや説明のつくことと、そうでないものを峻別し、人間理性が理解し説明のつく範囲内で、人間は生き、行動することが求められる。即ち、カミュの見解からすれば、事実認定として神の存在を確認、感知できない以上、人間は、神の概念の外で、現実を、人間世界を統御していかなければならない。それで、カミュは、人間に説明のつかないところ、分野、世界があるということで、超人間的存在を見出し、「神」の概念を導入するハイデッガーやシェストフ、キルケゴールなどの論理の飛躍を《Un saut》と批判し、人間の形而上的状态である不条理は神へは至らないと、明言する。

L'absurde, qui est l'état métaphysique de l'homme conscient, ne mène pas à Dieu. (PL II, 128)

更に、祈りとは思考に夜が訪れたときになされるものであるという、人間として生きる思考の断念を暗示するアランの言葉に言及しているが、

La prière, dit Alain, c'est quand la nuit vient sur la pensée. (PL II, 146)

即ち、自らの理性による現実・事実分析によって誠実、着実に現実に対応・対処し生きるのではなく、「祈り」という曖昧模糊とした概念、神に寄りかかり、身を神に委ね、自己責任を放棄して生きることへの危うさを、カミュは指摘、批判し、あくまで自らの思考と判断によって屹立し、自立的に生きることを求める。ここに、カミュの「人間主義 humanisme」と人間の「自由」が生まれてくる。『*Le Mythe de Sisyphe* シーシュポスの神話』でカミュが正に言っているように、不条理な人間はまさにこの神の外で生きており<sup>5</sup>、キリーロフが言うように「もし神が存在しないなら私が神だ。」ということであり、

Si Dieu n'existe pas, je suis dieu. (PL II, 184)

死が不可避な唯一のものだという事実を除けば、人間にとって悦びであれ苦しみであれ、一切が自由である、ということになる。

Ce qui reste, c'est un destin dont seule l'issue est fatale. En dehors de cette unique fatalité de la mort, tout, joie ou bonheur, est liberté. Un monde demeure dont l'homme est le seul maître. (PL II, 192)

カミュ的立場からすると、「人間は、一人一人が神的存在であり、各々が自らのことを自ら決定しうる完全な自主独立性、自立性をもった存在としてある。」ということである。従って、人間は限りなき豊かな自由をもち、その限りなき豊かな自由の中で、自由自在に生きていくことの出来る至福を持つ存在となる。カミュは、「人生は意義がなければいけないだけ、それだけいっそうよく生きられるだろうと思えるのである。」と言っているが、

Il s'agissait précédemment de savoir si la vie devait avoir un sens pour être vécue. Il apparaît ici au contraire qu'elle sera d'autant mieux vécue qu'elle n'aura pas de sens. (PL II, 138)

人生の意義、即ち、宗教的概念或いは、外的観念による人生の意味付けがなければいけないだけ、自分の人生という白いキャンバスに自由自在に自己の人生を描き、自由自在に自己の人生を生きることが可能になる。そうした人間存在と人間把握の中から生まれてくる生き方の結論は、人生の中で与えられた一切を汲み尽くそうとする生き方である。『結婚 *Noces*』で言及しているように、カミュにとって、「死 *La mort*」とは、それを通じて、天国や地獄など別の生 *une autre vie*、あの世 *Au-deà* に至る開かれた扉ではなく、*la porte fermée* 閉ざされた扉であり、「死」をもって総てが終わり、身体は朽ちて、自然に帰っていくということである。従って、与えられた生の機会に一切を汲み尽くして、この世、現世 *ce monde*、この人生 *cette vie* を最大限に享受し生きていく、という生き方が強く望まれてくる。そこから、最大限の経験を享受し、最大限に生きるというカミュ的「量の倫理学」が生まれてきて、「重要なことは、最も良く生きることではなく、最も多くを生きることだ」

ce qui compte n'est pas de vivre le mieux mais de vivre le plus. (PL II, 143)

という結論につながっていく。そして、不条理に目覚めた人間の生き方として、次のような人間の在り方と、生き方を提示していく。

「不条理な人間とは実際何なのか。永遠を否定はしないが、永遠のためにはなにもしない人のことだ。永遠への郷愁が彼には無縁のものだからではない。永遠よりも彼は自分の勇気と論証力のほうを愛するのだ。勇気は、上訴の道を閉ざされたところで生をこれっきりのものとして生き、自分の持っているもので自足する方法を彼に教え、論証力は彼に自分の限界を悟らせる。限度のある自らの自由、未来のない反抗、いつかは必ず滅びるものとしての自分の意識、それを固く信じている彼は、自分の生の時間のなかで冒険を追求していく。そこにこそ彼の活動領域がある。」

Qu'est-ce en effet que l'homme absurde ? Celui qui, sans le nier, ne fait rien pour l'éternel. Non que la nostalgie lui soit étrangère. Mais il lui préfère son courage et son raisonnement. Le premier lui apprend à vivre sans appel et se suffire de ce qu'il a, le second l'instruit de ses limites. Assuré de sa liberté à terme, de sa révolte sans avenir et de sa conscience périssable, il poursuit son aventure dans le temps de sa vie. Là est son champ, là son action qu'il soustrait à tout jugement hormis le sien. (PL II, 149)

神に寄りかからない勇気を持ち、上訴の道という来世・あの世に頼ることもなく、朽ち果て自然に帰る存在としての自己を認識しつつ、「明視と論証力」という自らの知恵と工夫によって明晰に生き、たった一度きりの人生を最大限に生きていこうとするのが、不条理に目覚めた人間である。

また、Vivre le plus 最も多くを生きる、最大限に生きるには、意識の覚醒化が欠かせない。意識を覚醒した状態において、あらゆる経験が、完全に自己のものとなり得、経験の最大限の収集・所有へと繋がっていく。カミュが、「不条理とは死を意識しつつ同時に死を拒否することだ」という限りにおいて、不条理は自殺の手から逃れ出してしまうのだ。死刑囚の脳裏をよぎる最後の思考がぎりぎりの極限点にいたり、めくるめく死への転落がいまにも起ころうとするまさにその直前の地点で、しかもなお彼が数メートル前方に眼にする靴紐、不条理とはそれだ。自殺者の正反対のもの、まさしくそれが死刑囚である。」と語っているのは、象徴的である。

Il échappe au suicide, dans la mesure où il est en même temps conscience et refus de la mort. Il est, à l'extrême pointe de la dernière pensée du condamné à mort, ce cordon de soulier qu'en dépit de tout il aperçoit à quelques mètres, au bord même de sa chute vertigineuse. Le contraire du suicidé, précisément, c'est le condamné à mort. (PL II, 138-139)

これは小説『異邦人』を象徴しているが、死刑囚が数メートル前方に眼にする靴紐とは、死の直前までの意識の覚醒状態・明視・明晰状態を意味し、これは、死の直前までの極限的な「生の肯定」を表わしている。カミュに於いては「生」というものが究極的に最高の善であり、極限までそれが肯定され最大限に生きられようとする。その表われが、医師リユーを中心とした人間生命の価値肯定の運動たる『ペスト』であり、また、『幸福な死』に於いてはメルソーという主人公によって太陽と海、アブサントやロマランの香りなど自然の美と豊穡を享受しつつ生を最大限に生き、死の直前までの意識の最大限の拡張、所謂「意識的な死」<sup>6</sup>が実現され、「生の肯定」が具現化されていく。

このような「人間生命」とその「生」の肯定、即ち「人間主義」は、宗教世界の価値観と対置状況にある。宗教的価値観からすると、『ペスト』などの子供の死に見られるように、人間の生命の死が、神のもとに召されたとして肯定されることがある。一回きりの生という思念を持つカミュ的な見地からすると、人間の生命の軽視としか考えられないが、宗教的観念自体が、あの世・来世への指向を持ち、来世の観念によって「現世」を規定付けようとする傾向を持つ。然し、来世の観念によって現世での行動が制約を受けるのは、死後の世界や神の世界というその存在自体が確認できない「ヴァーチャル・リアリティー・仮想世界」に「現実世界」と「人間の生」が歪められ、人間の生の重みと正統性<sup>7</sup>が損なわれることに繋がり、カミュ的現実主義、ヒューマニズムと対立矛盾することになる。カミュは、現実世界と現世、生の重みを初期作品から一貫して肯定・称賛しており、例えば、『結婚』に於いて、カミュは生に対する罪があるなら、それは生に絶望することではなくて、別の生を希求したり、そうした別の生の不俱戴天の偉大さに身を隠したりすることだ、と述べている。

Car s'il y a un péché contre la vie, ce n'est peut-être pas tant d'en désespérer que d'espérer une autre vie, et se dérober à l'implacable grandeur de celle-ci. (PL II, 76)



更に処女作『裏と表 *L'Envers et l'endroit*』の最初のエピソードは、カミュの祖母といえる一人の老婆のエピソードであるが、その老婆は病身で、神を信じそれに頼って生きている。人間ではなく神に頼って生きているということ自体が、老婆を人間世界や現実世界から隔離していく大きな要因となり、人間を救うのは「神」ではなく人間であるという「人間主義」がここでも謳われ、『異邦人』や『ペスト』にも見られる「神主義」と「人間主義」の対置構造が既にここに於いて見受けられる。そして、このカミュの「人間主義 humanisme」の、その根底に、人間存在が自然の一環物としてあるというナチュリズムが見受けられ、それを基底・源泉としてカミュ的思想世界、文学世界が展開していくのがわかる。

### 3. カミュの自然主義

そのナチュリズムの顕現の最も美しい作品が『*Noces* 結婚』である。例えば、カミュは、「僕らは、教訓も、偉大さに人が求める苦い哲学も、求めはしない。太陽と接吻と野性の香りのほかには、一切が僕らには空しく思える。」と述べ、手放しの自然讃歌を行う。

Nous ne cherchons pas de leçons, ni l'amère philosophie qu'on demande à la grandeur. Hors du soleil, des baisers et des parfums sauvages, tout nous paraît futile. (PL II, 56)

或いは、「聖サルサ教会堂はキリスト教だ。然し、入口から見る度毎に僕らのもとへ届くのは、この世界のメロディーだ。」という文章の中で「自然」を讃美し肯定し、

La basilique Sainte-Salsa est chrétienne, mais chaque fois qu'on regarde par une ouverture, c'est la mélodie du monde qui parvient jusqu'à nous. (PL II, 57)

教会の中においてさえ支配的なのは、世界の、自然のメロディーであり、ここに於いても、教会・宗教的世界が否定され、自然と世界の肯定というナチュリズムが顕現し、謳われている。更に、フランス語としても美しい、次のような文章の中で、「ここで僕は、秩序や節度は他の人々にまかせておこう。僕の全身を奪い去るのは、自然と海のあの偉大な放縦だ。」と、自然の懐の中に取り込まれる人間の至福を謳っている。

Ici, je laisse à d'autres l'ordre et la mesure. C'est le grand libertinage de la nature et de la mer qui m'accapare tout entier. Dans ce mariage des ruines et du printemps, les ruines sont redevenues pierres et, perdant le poli imposé par l'homme, sont rentrées dans la nature. Pour le retour de ces filles prodigues, la nature a prodigué les fleurs. Entre les dalles du forum, l'héliotrope pousse sa tête ronde et blanche, et les géraniums rouges versent leur sang sur ce qui fut maisons, temples et places publiques. Comme ces hommes que beaucoup de science ramène à Dieu, beaucoup d'années ont ramené les ruines à la maison de leur mère. (PL II, 56)

こうした文章には、自然の全的肯定が見られるが、人間存在と自然との関係性は、人間存在が自然の一つの構成要素、一環物としてあるということであり、人間の自らの存在が自然の中に取り込まれ、自然という全体の中に「統合化」され、アンテグレされた時に、人間存在の至福が実現され、ナチュリズムが成就される、ということである。例えば、次のような文章「あるがままのものになろうとし、自分の深い節度を探り出すのはそれほど容易ではない。だが、シュヌーアのがっしりとした骨格を眺めていると、ぼくの心は不思議な確かさで安らぐのであった。ぼくは息をすることを知った。ぼくは自分を全体の中に加えた。そして僕は、自分を成就するのだった。」にその典型が見られる。

Ce n'est pas si facile de devenir ce qu'on est, de retrouver sa mesure profonde. Mais à regarder l'échine solide du Chenoua, mon cœur se calmait d'une étrange certitude. J'apprenais à respirer, je m'intégrais et je m'accomplissais. (PL II, 56 下線は粟国による)

自然全体の中に自らの存在を加え、統合化し、成就する、そこに人間の至福が生まれる。或いはまた、「俳優が自分たちの役柄を満足に演じたと自覚するときにおぼえる感情というものがある。〈中略〉つまり僕は僕の役柄を立派に果たした。僕は、自分の人間としての仕事を果たした。」という文章の中で、自然の中における人間としての役割を、演劇舞台のように、自然の舞台の中で見事に果たすことにより、自然と一致し、統合、合一化され、自然の一構成要素としての人間存在の至福を享受することを謳い上げている。

Il y a un sentiment que connaissent les acteurs lorsqu'ils ont conscience d'avoir bien rempli leur rôle, c'est-à-dire, au sens le plus précis, d'avoir fait coïncider leurs gestes et ceux du personnage idéal qu'ils incarnent, d'être entrés en quelque sorte dans un dessin fait à l'avance et qu'ils ont d'un coup fait vivre et battre avec leur propre cœur. C'était précisément cela que je ressentais: j'avais bien joué mon rôle. J'avais fait mon métier d'homme et d'avoir connu la joie tout un long jour ne me semblait pas une réussite exceptionnelle, mais l'accomplissement ému d'une condition qui, en certaines circonstances, nous fait un devoir d'être heureux. (PL II, 60 上記訳文, 引用文とも下線は栗国による)

このようなナチュリスト的観点からすると、「死」というものも、人間存在が自然の一構成要素・一環物としてあるが故に、死をもって母なる大地、自然のもとへと帰る、人間存在が、その一構成要素であった自然のもとへ帰り、文字通り自然と合体し、統合化されるということであり、そこには何の不安も恐れもない。不安や恐れがあるとすれば、「僕は最後の最後まで自分の明晰さを失いたくないし、いっばいの嫉妬と羨望で、わが身の最後を見とどけたいのだ。僕が死を恐れるのは、僕が世界から身を隔てるその度合いに応じてであり、持続する空を見つめるかわりに、生きている人間たちの運命に執着するその度合いに応じてなのだ。意識された死をつくるとは、世界から僕たちを隔てているその距離を縮めることであり、永遠に失われる世界のきわだったイメージを意識して、歓喜もなく、成就のなかに入っていくことだ。」と、カミュが述べているように、それは、人間が自然や世界と身を隔てている距離や度合いに応じてであり、逆に言えば即ち、人間的なもの、名誉や地位や資産などに執着する度合いに応じてである。

C'est dans la mesure où je me sépare du monde que j'ai peur de la mort, dans la mesure où je m'attache au sort des hommes qui vivent, au lieu de contempler le ciel qui dure. Créer des morts conscientes, c'est diminuer la distance qui nous sépare du monde, et entrer sans joie dans l'accomplissement, conscient des images exaltantes d'un monde à jamais perdu. (PL II, 65)

更に、ナチュリスト・カミュの醸成に大いに役立ったのが、幼年時代の貧困生活であり、また地中海の美と光の豊穡なる自然の存在を伴うアルジェの風土である。貧困

生活が役立ったメリットは、ある富裕な階層には、自然の美は、ある種の余録としての富であるが、貧しい者にとっては、値のつけられない「恩寵」と化し、その全的な美の恩寵の価値が、貧困者であったカミュの身と心に染み込んでいき、ナチュリストとしての感性と思想を育んでいく。それは、『裏と表』の《*Entre oui et non*》の章の「富がある程度にまで達すると、空でも、星がいっぱいの夜でも、自然の富のようにみえてしまう。だが下層階級では、空はそのあらゆる意味をもってしまう。つまり、値のつけられぬ恩寵となる。」という文章に現われる。

À un certain degré de richesse, le ciel lui-même et la nuit pleine d'étoiles semblent des biens naturels. Mais au bas de l'échelle, le ciel reprend tout son sens : une grâce sans prix. Nuits d'été, mystères où crépitaient des étoiles !  
(PL II, 24)

或いはまた、ナチュリスト・カミュを醸成する、自然の美の全的享受を示す少年時代の自然との融合一体化・合一の美しい文章として「夏の夜、星がまたたく神秘！〈中略〉だがかれは、両眼をあげて、清らかな夜を飲みほすのだった。」という感動的な文章がある。

Mais, les yeux levés, il buvait à même la nuit pure. (PL II, 25)

更に、アルジェリアの風土も、ナチュリスト・カミュが物事や事象を冷静に、明晰に見る目を養ったと言える。例えば、アルジェの風土として、「この国が要求するのは、明晰にものを観る魂、つまり慰めのない魂だ。ちょうどひとが、信仰に基づく行為をするように。」とあり、

Ce qu'il exige, ce sont des âmes clairvoyantes, c'est-à-dire sans consolation. Il demande qu'on fasse un acte de lucidité comme on fait un acte de foi. (PL II, 67)

また、「宗教や偶像のないこうした人々は、群集の中で生き、一人で死んでいく。」というアルジェ的風土について言及しつつ、

Ce peuple sans religion et sans idoles meurt seul après avoir vécu en foule.

(PL II, 73)

「その現在にすべてを投げだされたこの民衆は、神話もなく、慰めもなく生きている。彼等はその全財産をこの地上に賭け、以後、死に対しては無防備のままにしている。」とカミュは述べている。

Ce peuple tout entier jeté dans son présent vit sans mythes, sans consolation. Il a mis tous ses biens sur cette terre et reste dès lors sans défense contre la mort. (PL II, 74)

神や宗教的思念によって拘束されず、この地上世界・現世にすべてを賭けて生き、死に対しては死後の世界を考慮することなく無防備のままにしているアルジェの人々の生き方、これは、まさにカミュ的世界であり、カミュはこのような文化的風土のなかで生まれ育ち、地中海的風土の自然の美と豊穡の恩恵を受け、ナチュリストとして醸成されていく。そうした中から、カミュの無神論、現世肯定とこの世界で生の喜びを最大限に享受して、最大限に生きていく《Vivre le plus》という「不条理の思想」が生まれてくる。カミュ的視点に立てば、自然の一構成要素としての人間が生命を与えられた、我々が生きている「この現世世界」が、まさに「天国 paradis」そのものと言え、*Carnets I*で、カミュが、「僕はこの世界で幸福である。というのも僕の王国はこの世界にあるのだから」と述べ、

Je suis heureux dans ce monde car mon royaume est de ce monde. (Cl, 22)

また更に、『裏と表』のなかで、「このとき、僕の王国はすべてこの世にある」

A cette heure, tout mon royaume est de ce monde. (PL II, 49)

と明言しているように、光と美に満ちた豊穡なるこの自然世界、この現世で「自然」と共に生き、また内なる「人間の自然」に従って生きる、ということが人間の最高の至福に到るということであり、こうした考えが象徴的に表われた、人間の王国、天国はまさに「この世」にあり、この自然世界たる現世に於いて人間は幸福・至福を享受する、というこうした言葉に、カミュの生き方と思想、生の哲学が象徴・集約されていると言える。

## 註

引用文は、Pléiade版のALBERT CAMUS, *ESSAIS*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972. 及び、ALBERT CAMUS, *CARNETS I MAI 1935-1942*, Gallimard, 1990. に依拠しており、各々 PL II 及び CI と略記した。

## NOTES

1. MARCEL MÉLANÇONは、その著書 *ALBERT CAMUS ANALYSE DE SA PENSÉE* (ÉDITIONS UNIVERSITAIRES FRIBOURG SUISSE & LIBRAIRIE KLINCKSIEK, 1976) で

Le grand hymne de l'accord de l'homme avec la nature est chanté dans *L'Envers et l'Endroit*, *L'Été*, mais surtout dans *Noces*, où il s'agit précisément des noces de l'homme avec le monde.

—Cet accord avec la nature va de la familiarité à la parenté, et jusqu'aux noces. (p.210 下線：粟国による)

と述べ、人間と世界・自然との一致・融合・統合化の賛歌について触れ、人間と世界・自然との familiarité, parenté, noces について言及している。

2. Tipasaは、Algerから西へ70km程行ったところにある。ジャン・ギャバンの映画『ペペルモコ』で知られる「カスパ」の下に郊外向けのバスターミナルがあり、そこから*L'Etranger*でムルソーがマランゴの養老院に出かける冒頭のシーンのように、バスに乗りティパザを訪れることができる。1983年の夏、モンペリエ大学滞在中、マルセイユからエール・フランスで先ず、*La Peste*の舞台のオランを訪れ、次いで『異邦人』の舞台のアルジェに滞在、そこから郊外線のパスで、ティパザを訪れたことがある。ティパザは、バス停がどこにあるのか分からないような田舎の小さな村で、バスを降り立ち、なだらかな坂を海に向けて歩いていくと右手に港、左手に*Noces*に描かれている灯台が見え、その坂道を左手に行くと、「太陽と接吻の野性の香りのほかには、一切がぼくらには空しく思える」地中海の自然の美の世界へと入って行く。確かに、*Noces*に描かれるように、青い地中海に面した古代ローマ遺跡は美しく、カミュが友人のロベール・ジョソーやクリスティアヌ・ガランドー、イヴォンヌ・ミヤロンらと出かけた頃とほぼ同じ雰囲気が残っていて、カミュ同様、地中海の美と豊穡を享受する至福に出会うことになる。

Hachette社のles guides bleus/*Algérie* (1981年版)に《Parc national archéologique- Une promenade dans le parc archéologique de Tipasa vous séduira par ce merveilleux accord entre l'《appel des ruines》 et le charme puissant de la nature environnante; la patine dorée des vieilles pierres, le vert sombre et mystérieux de la végétation, les différents bleus du ciel et de la mer concourent à embellir ce site incomparable, que domine le Chenoua.》(p.197)とあり、カミュの*Noces*的世界を彷彿とさせる。

3. *Le monde* が *la nature* と同意義語の現われとして、ティパザの美しい自然・世界に入っていく、そこで人間存在と自然・世界との結婚・融合・合一化の至福の以下の引用文を挙げておく。また、注1のMÉLANÇONの言辭も参照のこと。

Nous arrivons par le village qui s'ouvre déjà sur la baie. Nous entrons dans un monde jaune et bleu où nous accueille le soupir odorant et âcre de la terre d'été en Algérie. (PL II, 55)

Au bout de quelques pas, les absinthes nous prennent à la gorge. Leur laine grise courbe les ruines à perte de vue. Leur essence fermente sous la chaleur, et de la terre au soleil monte sur

toute l'étendue du monde un alcool généreux qui fait vaciller le ciel. (PL II, 56)

Le visage mouillé de sueur, mais le corps frais dans la légère toile qui nous habille, nous étalons tous l'heureuse lassitude d'un jour de noces avec le monde. (PL II, 58)

4. 世界・自然の美と豊穡，そこに於ける人間の救い，生の歓びに関して，カミュは，以下のように語っている。

Mais l'homme y gagne une certaine familiarité avec le beau visage du monde. (PL II, 63)

Le monde est beau, et hors de lui, point de salut. (PL II, 87)

Tout être beau a l'orgueil naturel de sa beauté et le monde aujourd'hui laisse son orgueil suinter de toutes parts. Devant lui, pourquoi nierais-je la joie de vivre, si je sais ne pas tout renfermer dans la joie de vivre ? Il n'y a pas de honte à être heureux. (PL II, 58)

un point extrême de pauvreté rejoint toujours le luxe et la richesse du monde. (PL II, 84)

Il faut sans doute vivre longtemps à Alger pour comprendre ce que peut avoir de desséchant un excès de biens naturels. Il n'y a rien ici pour qui voudrait apprendre, s'éduquer ou devenir meilleur. Ce pays est sans leçons. Il ne promet ni ne fait entrevoir. Il se contente de donner, mais à profusion. (PL II, 67)

5. 不条理に目覚めた人間は，神という宗教的概念の外で，事実に基づき現実的に生きていく。

Mais il vit justement hors de ce Dieu. (PL II, 149)

6. 意識的な死とは，意識を死の瞬間に至るまで最大限に拡張し，生を最大限に生き，死に至るということである。『幸福な死 *La Mort Heureuse*』のメルソーは，そういった意味に於いて，死の直前まで意識を覚醒し，世界の美と豊穡を享受しつつ死に至る「意識的な死」を実現している。(拙稿『アルベール・カミュの幸福な死を巡って』—フランス文学論集1997/九州フランス文学会—参照)

7. 人間の生命の尊厳の肯定の言葉として次のような引用文を挙げることができる。

Et pourtant, c'est bien l'important cet homme devant moi, lourd comme la terre (PL II, 64)

A

Madame LEVI-VALENSI, Madame GERAUD

et

Monsieur Roger GRENIER

この論文は、私の留学の推薦状を書いて下さったカミュ研究の世界的権威でカミュ研究国際学会会長のレヴィ＝ヴァランシー教授と、留学の許可を与えて下さったピカルディー・ジュール・ヴェルヌ大学文学部大学院教授のジェロー教授、及びノーベル賞作家アルベール・カミュの40年代以来の友人で、現在私の親しい友人でもある、パリの作家ロジェ・グルニエ氏に捧げるものである。